

赤ちゃんポストからの学び



【赤ちゃんポストについて：ディベート】

このとりのゆりかごが運用される以前、赤ちゃんポストについて看護学生でディベートをしたことがあった。そのときの意見をまとめてみる。

賛成派の意見としては、以下のようなものがあった。

- 赤ちゃんには何の責任もない。この世に生を受けたのだから命を大切にするべきではないか。
- 望まれず生まれてきた子どもが虐待にあったりするよりは、救済処置があったほうがよいのではないか。
- 日本では中絶できるが、中絶できる期間が定められている。妊娠を知らずに過ぎてしまった人の救済措置となるのではないか。
- 捨て子が毎年 200 人出ているといわれている日本では必要でないか。
- ドイツでは、赤ちゃんポストができて、捨て子の数は変わってない。赤ちゃんがより安全なところに預けられるようになるのではないか。

反対派意見としては、以下のようなものがあった。

- 保護責任者遺棄罪に問われないのか。育児放棄、捨て子とはあまりにも無責任ではないか。
- 生まれても子どもを育てなくてもよいというような安易な気持ちでの妊娠・出産が増えるのではないか。
- ヨーロッパは里親制度が充実しており、それから派生して赤ちゃんポストができた経緯がある。里親制度の普及していない日本で実施するには時期尚早ではないか。
- 中絶できなくても、社会福祉施設に預けることができる。今ある制度をもっと利用しやすくすればよいのではないか。
- 一時的に赤ちゃんポストに預けて手放して、またやっぱり一緒に暮らしたいと思う親が出てきて、トラブルとなるのではないか。
- 赤ちゃんポストができたなら、老人ポストもできそうではないか。



【ディベートを通して感じたこと】

上記のようなディベートを通して私が一番思ったのは、赤ちゃんポストに子ども預けられた子どもの幸せについてである。親が身勝手に子どもを手放しても、預けられた子どもの幸せ・権利は絶対に保障されなければならない。

まず、日本は里親制度が充実していないため、預けられた子どもは、自立するまで乳児院のような社会福祉施設で暮らすことになるだろう。乳児院や母子寮などの社会福祉施設はもともと数が少ない上、今、虐待をくける子ども、DVに苦しむ母親でパンク状態である。またマンパワーも少ない。赤ちゃんポストに預けられ一時的に命を取り留めたからといって、そのような施設で本当に幸せに暮らしていけるのだろうか、と疑問に思う。赤ちゃんポストを設置するのであれば、子どもの社会福祉施設の充実も必要である。また、里親の制度も整備し、赤ちゃんポストに預けられた子が、本当に幸せに暮らしていけるように支援していかなければならない。

また将来、子どもが親にと思った時に親に会えるよう手続きを整えるべきであろう。自分が生まれてきた経緯や自分の親を知る権利は、子どもには認められるべきである。だから赤ちゃんポストに預ける親は、自分の氏名や連絡先を残しておくべきだと思う。育てられなくても、それが生んだ親としての最低限の責任ではないだろうか。また、親が会いたいときは、勝手に会いに行くのではなく、手続きをして子どもに会うか会わないか相談すべきである。その相談の際、子どもは大きな衝撃を受けることが予想されるため、そのときの精神的サポートを誰がするのか考えておかなければならない。子どもたちを支えるため、文書を交わした上で、赤ちゃんポストに預けるべきである。

また、赤ちゃんポストに預けられた子どもの医療費・教育費は、誰が払うのであろうか。国が税金から出すのであろうか。一人の子を大人に育てるのに、1000万円近くのお金がかかると聞いたことがある。これから全国に赤ちゃんポストができ、年間何百人もの赤ちゃんが預けられるようになるとたいへんな事態になると予想される。このような経済面からも子どもたちを支え、幸せな生活が送れるように援助していかなければならない。

以上のように預けられた子どもの幸せ・権利の保障を考えると、赤ちゃんポストが設置されるのは、時期尚早であったのかなと感じる。まだ、子どもの幸せに整えられるべきことが山積みである。では今度は、赤ちゃんポストが設置されて6ヶ月の現状を踏まえてさらに考えていきたい。



【倉敷で生後間もない女児置き去り】 2007年6月26日 山陽新聞

26日午前4時20分ごろ、倉敷市徳芳の保育園通用門の内側で赤ちゃんが泣いているのを自転車で通りがかった会社員男性（54）が見つけ、近くの交番に届け出た。生後約1週間の女の子で、倉敷署は乳児を置き去りにした保護責任者遺棄事件とみて捜査している。

調べでは、女児は身長44センチ、体重2666グラム。裸でバスタオル2枚にくるまれ、地面に直接置かれていた。同市内の病院に運ばれたが、健康状態は良いという。赤ちゃんが見つかった保育園に孫を通わせている男性（57）は「育てられない理由があったのかもしれないが、信じられない出来事。親としての責任感がない人が増えているのではないか」と話していた。

岡山県内では4月28日、JR児島駅（同市児島駅前）西出口にある公衆トイレに放置された女の赤ちゃんが見つかり、母親が保護責任者遺棄の疑いで逮捕された。6月6日も総社市門田の病院に生後2週間の男児が置き去りにされた。



【18歳女子大生を逮捕＝女児産み、保育園に遺棄－岡山県警】

2007年7月2日 時事通信

岡山県倉敷市の保育園に生後間もない女児を置き去りにしたとして、県警倉敷署は2日、保護責任者遺棄の疑いで同市に住む女子大学生（18）を逮捕した。「養育ができないから、保育園の敷地内に赤ちゃんを置き去りにした」などと供述しているという。

調べによると、女子学生は6月23日ごろ、自宅マンションの室内で、1人で女児を出産。同26日午前4時ごろ、保育園の敷地内にバスタオル2枚にくるんだ女児を遺棄した疑い。

女子学生は未婚で1人暮らし。大学入学前までは県内の実家にいたが、家族は妊娠に気付いていなかったという。



【赤ちゃんポスト半年】 2007年11月28日 読売新聞

薄れる抵抗感 進まぬ情報開示



親が育てられない新生児を匿名で受け入れる熊本市の慈恵病院の「赤ちゃんポスト」（こうのとりのゆりかご）は運用開始から半年が過ぎた。前例のない施設は妊娠・出産の実情を浮かび上がらせた。（熊本支局 掃本直行）

5月10日の運用開始から半年間、慈恵病院やゆりかごの設置を許可した熊本市は、預け入れがあったことさえ自ら公表することはなかった。

関係者の取材を積み重ねて、これまでに乳幼児8人（男7人、女1人）が預けられたことが判明した。うち障害のある男児1人は、親が思い直して引き取った。

運用初日の第1例さえ、一部メディアが報じて騒ぎになった結果、病院の蓮田太二理事長が「もう報道されているので認めます」と追認した程度だった。市はそういった発言さえ「言い過ぎだ」と苦言を呈した。

市はゆりかごの運用状況を3か月ごとに検証する組織を新設した。10月25日の初会合では、児童福祉や法律の専門家、市幹部らが出席し、「問題なし」との結論を出した。しかし、会合内容は一切非公表。「合格点」を出すために、どのような検証を行ったのかも明らかにしていない。

病院や市が情報非開示の姿勢を貫いているのは、預けられた子や親のプライバシー保護が最大の理由だ。しかし、ゆりかごはもはや一地方の特別な存在ではない。山口大経済学部の立山紘毅教授（情報法）が「プライバシー保護を前提に、積極的に情報を開示して社会的な検証につなげる必要がある」と指摘するように、養育できない親と、親から引き離される子のことを考える社会的な存在となっているのだ。

熊本市の幸山政史市長は「命の尊さや児童福祉の問題を多くの人に考えていただいている」と半年間を肯定的に受け止めた。それならば、国内で前例のない取り組みであり、「失われる命を救う」「養育放棄を助長する」との賛否両論があるだけになおさら、可能な限り情報を開示し、社会全体で検証することが望ましいのではないかと。

運用半年の会見で、蓮田理事長は、「（同種施設が）国内に一つしかないことを考えると、決して多いとは思わない。命を救っている」と意義を強調し、ゆりかごを利用した半数近くの親が育てられない理由を記した手紙を病院あてに残したことを明らかにした。内容を語ることはなかったが、「心理状態は深刻で、悲しみや恐れ、罪の意識がうかがえる」と評した。

そういった切羽詰まった状況に追い込まれている親が少なくないことも、ゆりかごの設置を機に浮き彫りになったと言えよう。ゆりかご構想が公表された昨年11月以降、病院

に親からの悩み相談が急増したことからも理解できる。

昨年11月からの1年間、病院には電話や来所で妊娠・出産の悩み相談が362件あった。2005年度の70倍以上だ。ゆりかごを許可した熊本市も、この半年間で480件以上の相談を受けた。

「妊娠が分かったら交際相手が逃げた」「臨月を迎えてから病院に相談したが、受け付けてくれなかった」。こんな相談が病院に相次いだのは、妊娠・出産の悩みの受け皿となる機関や施設の機能が全国的に十分に整っておらず、身近ではないことが背景にあるだろう。恵泉女学園大の大日向雅美教授（発達心理学）は「妊娠や育児に悩む親は、どこへ行けば誰が助けてくれるのか知らないケースが多い。ゆりかごはそういう親のシンボルタワ的な存在になった」と指摘する。

預けた親がこれまで刑事責任を問われた例はない。預け入れに法的な歯止めをかけるのは難しい状況で、今後、預け入れという名の“子捨て”に、次第に世間の抵抗感が薄れていくことも心配だ。

「ゆりかごのない社会が理想だ」。蓮田理事長はこのように逆説的な命題を社会に対して突きつけた。8人の中にはゆりかごによって生かされた命があるかもしれない。その意味では評価できる。しかし、捨て子を前提とする施設がこの社会にあることの是非を考えていくべきだろう。社会全体で慈恵病院の取り組みを見守り、議論を深めていくためにも、適切な情報公開は欠かせない。

【3つの新聞記事を通して感じたこと】

はじめの2つの新聞記事から、岡山でも女子大生が一人で出産し、赤ちゃんを遺棄し逮捕されるという事件が起こっていたことを知り、身近に、実際に置き去りがあったことに本当に驚いた。この女子大生は、逆算すると高校3年のときから妊娠していたことになる。妊娠中悩み、学校生活や日常生活でも困ったはずだが、なぜ妊娠のことを親に言い出せなかったのか疑問が残る。出産後、女子大生は保育所の前に置いたことから、自分は育てられないが誰かに育ててほしかったのかもしれない。

もし岡山に赤ちゃんポストがあれば、赤ちゃんポストに預けに行っただけであろう。そして預けることができているならば、この女子大生は逮捕されることもなかったのだろう。赤ちゃんポストでは預けた親がこれまで刑事責任を問われた例はない。同じ置き去りなのに、置く場所が赤ちゃんポストか否かだけで刑事責任を問われない矛盾を感じた。また、刑事責任を問われないなら、赤ちゃんポストに預ける際は名乗ってもよいのではないかとも思った。

今回、この置き去りにされた女兒は、運よく通行人に発見されたため、一命を取り留めたが、発見されていなければ亡くなっていた可能性も考えられる。赤ちゃんの生命のことを第一に考えるのであれば、やはり岡山にも赤ちゃんポストが必要なのだろうか。

しかし、赤ちゃんポストができたことにより、病院への相談件数が 70 倍となっており、妊娠・出産の悩み相談窓口の少ない現状が明らかになっている。この事件の女子大生も相談できるところがなかったのではないかと考えられる。そう考えると赤ちゃんポストを設置する前に、妊娠・出産の相談窓口をまずは設けるべきであろう。妊娠・出産に関して相談される内容から、どのような支援・教育・情報の提供が必要か考え、その地域ごとに対策を講じていくことができる。

慈恵病院このとりのゆりかごは運用開始から半年間、乳幼児 8 人が預けられた。しかし、どのような子が預けられたかの詳細は発表されておらず、預けられた子ども一人ひとりの背景はわからないままである。なぜその子が預けられたか、その理由がわからない限り、根本となる原因がわからず対策を練りようがない。このままでは預けられる子どもが増える一方である。

また、預けられた子どものうち、障害のある男児 1 人は、親が思い直して引き取ったようである。ディベートをしていた際、障害があつたら、赤ちゃんポストに捨てるという母親が出てくるのではないかという懸念が上がっていたが、まさにその通りのことが起きている。障害があつたら、赤ちゃんポストに捨てるという母親が出てくる背景には、障害者への支援不足、社会の差別、生きにくさがあるのではないかと感じる。この母親が何をきっかけに思い直し引き取ったのか、そこから学ぶところは大きいにある。このことに関しても情報から障害者に対する支援・対策へとつなげていけるであろう。

赤ちゃんポスト（このとりのゆりかご）が設置され、8 人の乳幼児が預けられた。この 8 人の乳幼児の背景から、“いのち”について日本中で学んでいかなければならない。そのためには、もう少し情報が公開される必要があり、その上でみんなで考えていく必要がある。

